

大山町議会議長 杉谷 洋一 様

大山町議会 総務常任委員会



平成30年大山町議会議員研修報告書

1	日時	平成30年10月1日(月)～3日(水)
2	研修地	岡山県…奈義町、西粟倉村 徳島県…神山町、上勝町
3	研修内容	(内容・場所)
		(1) 岡山県奈義町 ～ナギカラ～
		(2) 岡山県西粟倉村 ～百年の森構想～
		(3) 徳島県神山町 ～NPO法人グリーンバレー～
		(4) 徳島県上勝町 ～OWASTE・いろどり～
4	研修結果 又は概要 (意見・感想)	<p>(1) 岡山県奈義町 「ナギカラ」 「合併しない」を選択し、6000人の人口を維持することを決めた。 総合戦略策定にあたって、1000人の町民と中高生全員にアンケートや町内各グループや団体に意見を聞き素案を作った。その中に地域再生法人として「ナギカラ」が生まれた。</p> <p>町から業務委託を受け、当初約1000万円だった委託金は平成29年度2億9000万円にもなった。公共的な事業は教育・福祉・文化芸術の支援などで再委託もある。(背景には活動内容を議会開催前に一日時間確保し議員個々に説明と意見交換ができています。また、視察のときもナギカラ職員だけでなく、議員、町民とも一緒に行く。月一回のナギカラ通信全戸配布、など町民と一緒に事業をやっていくことを大切にしていた。) また、自主財源を確保する為に収益性のある事業にも取り組んでいる。</p> <p>その中で代表的な2つを紹介する。</p> <p>しごとコンビニ 短時間でも自分に合った働き方ができ、子育て中の方は子供を預かってもらえる仕組みまで作っていた。</p> <p>ナギフトポイント 町内の参加店舗での買い物や、町が行う検診や図書館利用など独自性のある取り組みにポイントを付与している。たまったポイントは町内の参加店舗で品物に交換できる。</p>

4	調査結果 又は概要 (意見・ 感想)	<p>(2)岡山県西粟倉村</p> <p>村面積の95%が山林で林業が衰退している時代に森林を柱とし、豊かな森林とともに生きることを決断した。不在地主の土地を役場が積極的に集約し整備しやすくする、行政と民間が共同で「森の学校」という第三セクターを設立し切り出した木材に付加価値をつけた商品開発や、小規模だからこそ小回りの利くエンドユーザーに直接届く商品作りなど、「百年の森林構想」が単なるデスクプランにとどまらず、合併しない小さな自治体として、地域をどう守っていくか、町の戦略的ビジョンとしてしっかり生かされていると感じた。</p> <p>構想の始まりから取り組みのなかで、個人や企業・団体のつながりが大切にされていて、そのことがローカルベンチャーの取り組みにも生かされていると思う。</p> <p>「生きるを楽しむ」を村づくりの柱にしている西粟倉村の取り組みは、「楽しさ自給率の高いまち」を目指す本町にとって参考にすべきことが多く、今後も同村の取り組みに注目したい。</p>
		<p>(3)徳島県神山町 ～「神山プロジェクト」に学ぶ～ NPO法人グリーンバレー</p> <p>徳島県では地デジ移行に対応するため全県下にCATV網を整備。普及率は全国一位の88.9%(全国平均は51.8%)これを利用するとブロードバンド環境は東京の10倍の速度で使用可能となり都会との情報格差が解消され映像の一極集中データ保存から分散型のデータ保存が可能となった。また川の中の石に座り豊かな自然の中でインターネットを使った仕事をしている写真が経済雑誌に掲載されると注目をあびた。サテライトオフィスの誘致をきっかけに過疎化の進む地方で、賑わいを取り戻した徳島県神山町を視察した。活動の中心となっている、NPO法人グリーンバレーの歩みを聞き、拠点となる施設も訪問した。</p> <p>その中で興味をひいたのが、神山塾という半年間の職業訓練を行うところ。20代後半の東京周辺の若者が中心で、デザインや編集ができるクリエイターが多く含まれる。2010年にスタートして、8期140名が巣立ち、半数が町に残った。その内、9組がカップルとなり、婚活にもなっている。現在、その若者が中心となり、町内で起業、空き家対策で移住促進や農林業振興、商店街活性化などに取り組んでいる。</p> <p>また、元家具製造の建物を再利用した、起業家たちのオフィス兼店舗も見学した。仕事を生み出す若者を支援することの必要性も感じた。</p> <p>やはり、きっかけはともかく、長い目で見た人材育成は必要であろうと感じた。本町も移住者の窓口は開いている。すぐには結果は出ないが、環境は整ってきている。今後の町づくりでの、若い世代の人材確保の参考としたい。</p>
		<p>(4)徳島県上勝町</p> <p>1. 株式会社いろどり</p> <p>1981年に、この地域が大寒波に襲われ、ほとんどのみかんが枯死し農業は大打撃を受けた。この歴史的な大災害を乗り越えるため、当時の農協の職員の横石知二さん(現、株式会社いろどり代表取締役社長)が考案したのが「葉っぱビジネス」で、もみじ・柿や椿の葉っぱなどを料理の”つま物”として商品化した事業である。</p> <p>農協に寄せられた葉っぱの注文は、常時、新しい情報が生産者に提供され、お年寄りには、パソコンやタブレット端末を操作して注文を受け、この時、早い者勝ちで出荷者が</p>

決まる。注文が取れば山や畑に行って材料をそろえ、葉っぱの品質や大きさをそろえることで指先を使い脳が活性化し認知症の予防や山を上り下りすることで足腰が丈夫になり健康維持と寝たきり予防にもつながり、超高齢社会の健康長寿に貢献している。

また、各農家の売上げの順位付で生産者の競争心を刺激しながら、一番多く稼ぐ人で年1千万円を超え、このビジネスは高齢者でも品物が軽量のため運搬がしやすく、輸送に有利だったことも成功要因の一つと言える。

このように、身近な所に新しい発想や埋もれたアイデアがあり、それを掘り出し磨き上げることが重要であると考える。

2. ごみリサイクル

上勝町では、ごみゼロを目指す「ゼロ・ウェイスト宣言」を日本で初めて行なった。ごみの焼却は、大気汚染や地球温暖化に影響し異常気象の原因となり、各地で災害が発生し住民生活や自然環境に対して大きな問題となっているので、「埋立てと焼却をなくす運動を展開する」というのが、「ゼロ・ウェイスト宣言」の目指す姿である。

1990年代まで野焼きによるごみの焼却を行っていたが、ごみの分別とリサイクルを町全体で徹底し、ごみを13品目45分別して、2016年度にはリサイクル率81%を達成した。

町の収集車でごみの回収は行わず、家庭でのごみ処理を行うため、家庭用生ごみ処理機の購入補助を開始した。家庭で残ったごみは、ごみステーションに住民が各自で持ち込んで分別しながら捨てる。併せて、独居老人や車を持たない世帯を対象として高齢者等収集支援事業も行っている。住民には、ごみのリサイクルの取り組みを納得し協力してもらうため、運搬、焼却、灰の埋め立てに至るまでのコストを算出し数字で明記して理解をお願いしている。ごみの整理整頓はシルバー人材センターのスタッフで行い、また、ごみステーションにある「くるくるショップ」には、衣類や雑貨、家電製品などの使用可能なものが並び、全て無料で持ち帰ることができるようにした。持ち込みは町内の住民に限定されているが、持ち帰りは町外の人でも可能としている。

ごみリサイクルは、ごみの細かな分別で資源リサイクル率を上げることであり、それには住民の理解と協力が一番重要であり、その信頼構築の中で行政は積極的な関わりを持つことが必要である。

(5) まとめ

視察先それぞれ『合併しないまちづくり』、『上質な田舎へ』、『自然の中でのテレワーク』、『つまものビジネス』、『ごみのない社会へ』など、どの事例テーマを掲げ、新たに観光名所を造ったり、地域の特色を打ち消したりはしておらず、地域にあるものを巧みに生かしていた。

すべての場所で感じたことは、どこも身の丈にあった事業規模で無理をしないで続けられていること。役目や義務で取り組まれているのではなく“生きるを楽しむ”として取り組まれている姿が印象的であった。地元住民と移住者が参加しやすい場づくりが出来ていることはもちろん、間口は広く情報を共有し、住民参加型のまちづくりであった。

4 調査結果
又は概要
(意見・
感想)